伝良源撰『金剛寿命陀羅尼経疏』における延命思想の考察

大谷欣裕

はじめに

『金剛寿命陀羅尼経』とは、いわば延命を主眼とする内容で構成された経典である。また、『金剛寿命陀羅尼経』が日本密教において果たした役割は非常に大きい。それは、「普賢延命法」を担う所依の経典の一つに数えられることと、この修法が日本密教の中で最大の秘法とされる御七日御修法や延暦寺御修法[1]における「五大法」の一つであることを考えるのであれば、その重要性を窺い知ることは可能であろう。本経典をめぐる研究については、密教における延命の諸形態に言及した栂尾祥雲氏の論考[2]を始め、インド、中国、チベットにおける延命法の成立過程を関連する経典の内容から整理した初崎正純氏による考察[3]、或いは延命思想という観点から密教における死生観の一端を解明しようと試みた頼富本宏氏の成果[4]がこれまで確認される。

ところが、本経の日本における教学的展開については、未だ検討がなされていないと考えられる。これは恐らく、『金剛寿命陀羅尼経』自体が非常に短編であり、思想的展開が見出しにくい文献であることが一つの要因と考えられる。そもそも本経典に関する註釈書自体、ほぼ現存していないこと[5]がその証左となろう。

こうした中、本経典にかかる数少ない註釈書の一つに、慈恵大師良源（九一二～九八五・以下良源）の撰述とされる『金剛寿命陀羅尼経疏』（一巻・以下『陀羅尼経疏』）が現存する。良源といえば周知の如く平安初期の天

台宗を代表する名僧であるが、良源の教学に関してもまた、現存資料の乏しさ、或いは未翻刻化が相俟って、精緻な検討が為されていない。教学面については、『九品往生義』における浄土思想[6]や天台教学の難題を扱った『被接義私記』に関する論考[7]、『草木発心修行成仏記』をめぐる草木成仏思想[8]などがこれまで良源教学の研究の課題[9]とされてきた。こうした研究は良源および平安初期の日本天台における思想的展開を理解する上で重要な示唆を与えてきたことは確かである。しかし、良源の密教観という側面に関しては、本覚思想[10]との関連以外、具体的な研究は皆無に等しい。

そこで、本稿では『金剛寿命陀羅尼経』の日本的展開および良源教学の解明という両分野における研究促進の一助を担う目的から、『陀羅尼経疏』の翻刻を行い、その思想的特徴を紹介する。そして、密教および延命思想という視座から、良源教学の一端を解明してみたい。

一 『金剛寿命陀羅尼経』とは

さて、『陀羅尼経疏』に言及する前に、まずは基礎となる『金剛寿命陀羅尼経』について触れておこう。そもそも延命に関する経典・儀軌類は、漢訳を中心にまとめると十五種にもおよぶ。このうち、「金剛寿命陀羅尼」を題にもつ経軌（四本）と、同系列に属する経典（一本）が不空（七〇五～七七四）によって訳出されており、すべて『大正蔵』巻二〇に収録されている。今、この五本を訳出年代順に従って配列すると次のようになる。

A『仏説一切如来金剛寿命陀羅尼経』（一巻）
B『金剛寿命陀羅尼念誦法』（一巻）
C『金剛寿命陀羅尼経法』（一巻）

D『金剛寿命陀羅尼経』（一巻）

E『仏説一切諸如来心光明加持普賢菩薩延命金剛最勝陀羅尼経』（一巻）

頼富氏は、各経軌に説かれる陀羅尼の内容から延命の具体的方法を判断し、（I）「長寿陀羅尼系」と（II）「金剛寿命真言系」の二系統に分け、A本は（I）に、B～E本は（II）にそれぞれ配分[11]している。また、これら五本の内容を比べると、A本およびE本の教主は釈迦牟尼仏であるが、B～D本は毘盧遮那仏であること、また、A本およびE本は恒伽河辺所説であるのに対し、B～D本は須弥山頂所説という相違点がある。このことは、A～Eは同じ密教経典の範疇内にあるとはいえ、密教の分類法でいうところの雑密から純密へとその思想的発展があったことを示唆している。そしてこれら諸本は空海（七七四～八三五）等によって請来され、以降日本密教における代表的修法の一つである延命法の形成に大きな影響を与えることとなる。

今回取り上げる『金剛寿命陀羅尼経疏』とはA本の註釈書である。そこで基盤となる『仏説一切如来金剛寿命陀羅尼経』の内容について概観しておきたい。

［内容］

ある時、仏がガンジス河の岸において諸比丘諸菩薩及び四天王を含む無量の天人と共に在ったとき、四天王に向かって死怖の対治法（金剛寿命陀羅尼）を説いた。その内容を聞いた四天王は、衆生の為にこの法を宣説してほしいと仏に懇願した。すると仏は東方を向き弾指して一切如来を召集し、衆生の為にこの法を説いて非命の業を転じ、寿命を増長させることを誓った。仏が一切如来と加持し、異口同音にこの陀羅尼を唱えると今度は執金剛菩薩を筆頭とする諸菩薩と四天王を含む一切の天衆がこの陀羅尼を授かり、一切衆生のために各々この陀羅尼を説き広めた。そして仏が再度四天王に向かって、「この陀羅尼を日々読誦すれば三悪道に堕ちることなく寿命は増長し、また、この経を転読すれば天死、非命等のありとあらゆる恐怖・苦難

から逃れることができる」と説き終わると、四天王を含む対告衆は皆、歓喜奉行したという。

尚、本経の訳者については「南天竺國三藏金剛智譯」となっている。しかし、『大正蔵』本の底本となった高麗本では「不空訳」とあり、他の類本では「金剛智と不空の共訳」とする問題が既に指摘[12]されている。しかし、円仁（七九四～八六四）の『入唐新求聖教目録』や円珍（八一四～八九一）の『智証大師請来目録』では「金剛智訳」とあり、また安然（八四一～？・一説九一五）の『諸阿闍梨真言教部類総録』も同様となっている。よって日本に伝来された段階では「金剛智訳」として認識されていたのは事実である。

以上の内容を踏まえた上で、以下、『陀羅尼経疏』について触れていく。

二　『金剛壽命陀羅尼経疏』書誌概要

まずは現存資料の確認をしておきたい。写本については『国書総目録』によると三本確認でき、青蓮院吉水蔵の正応元（一二八八）年写本が最も古く、次いで吉祥院南渓蔵の宝暦十二（一七六二）年実霊[13]（一七一七～一八〇〇）写本および文政十（一八二七）年豪観（一七五五～一八二七～？）写本[14]まで下る。

刊本については同じく『国書総目録』をみると大谷大学、京都大学、生源寺所蔵本に関する記載があり、『仏書解説大辞典』ではこれに日本大学を付記する。また、『日本古典籍総合目録』データベースには、四天王寺国際仏教大学、その他の目録類では摂州大念仏寺蔵版本[15]の所蔵をそれぞれ伝えている。

筆者はこのうち、大谷大学図書館所蔵本[16]（以下・谷大本）および京都大学附属図書館蔵本[17]（以下・京大本）を調査する機会を得た。そこで、両書の比較を通じて書誌概要について紹介しておく。（尚、本論にて引用する『陀羅尼経疏』の原文・丁数はすべて谷大本に基づくものとする）

（1）谷大本の構成

谷大本は以下の五つで構成されている。

①『佛説一切如来金剛壽命陀羅尼経』本文（一丁表～四丁裏）
②『金剛壽命陀羅尼経疏』（五丁表～十七丁裏）
③『古翻壽命経中真言梵字本』（十八丁表～十九丁裏）
④『新翻壽命経真言梵本』（十九丁裏～二十丁表）
⑤『金剛壽命陀羅尼経』関連目録（『慈覚大師入唐新求聖教目録』、『勘定前唐院見在書目録』、『八家秘録』所載）（二十丁裏～二十一丁裏）

このうち、②、③、④の各末尾及び巻末にそれぞれ識語を有する。まず、②の末尾には以下のようにある。

書本云慈恵大僧正撰也。此書未レ有二多本一、可二秘蔵一。干時延應元年五月十一日、以二或人本一写レ之大師作之。由依二尤貴一、払二老眼一取レ奉二写之一已是此法之口決也。不レ可二聊尓一而已

正應元九月卅日於二摂州有馬草庵一書写校了

求法隠士月観

すなわち月観（？～一二八八～？）が正応元年に摂州有馬（畿内）の草庵にて書写したとあるが、ここで、延応元（一二三九）年五月十一日付の奥書を有する写本の存在が明かされている。延応元年書写本に関しては『古典籍総合目録』に「『寿命経釈』【写】青蓮院吉水蔵（延応元写）」とあるものの、『青蓮院門跡吉水蔵聖教目録』には、「鎌倉時代正應元年寫」本に関する情報しか見あたらない。尚、『聖教目録』では『寿命経経釈』という名で採録されており、そこには右の識語と大同小異[19]の奥書が掲載されている。このため、②の本文は青蓮院本が底本であると解釈して問題はなかろう。

また、③の末尾には「朱書 已上与二唐院本一校合了。但唐院本无二眞言題一。又従レ是已下件本無レ之云云（十九丁裏）」とあり、園城寺唐院の伝写本の存在を伝えている。この唐院本についても詳細は不明であるが、右の内容から唐院本は、少なくとも②と③によって構成されたテキストであったことがわかる。

さらに④の末尾には次のようにある。

宝暦十二年壬午三月廿八日、以二青蓮院宮蔵本一、写レ於二叡山南谷吉祥院密室一。　遍照金剛實壺

文政十年丁亥二月七日、於二比叡左脚星光院別房一、令二書寫一畢。　比丘大僧正豪観七十二

ここには吉祥院南渓蔵所蔵の二つの写本に付された奥書と考えられる内容が看取される。そして⑤の巻末には以下の識語[19]がある。

慈恵大師撰金剛寿命経疏、蓋延応之頃猶不レ有二多本一云云。況弘化之今更無レ可二対校一而已。爰則唯如二原本一僅以手書且写二経及梵文等一乃併二疏之前後一焉…（中略）…葵賓初旬、清浄金剛某応二教弥権僧正需一者也。

総括すると谷大本は三つの写本を基盤としたものに、『仏説一切如来金剛寿命陀羅尼経』本文（①）と諸目録（⑤）の書写を②の前後に附し、弘化年中（一八四四～一八四七）或いはそれ以降に開版されたものと推察される。

（2）京大本の特徴

次に京大本であるが、諸目録では刊本所蔵を伝えてはいるものの、実際は写本であることが判明した。京大本は蔵経書院本（日蔵未刊文庫）であり、書写年は不明だが、テキスト構成は谷大本と全く一致する点や、谷大本の原文に付される下註の内容がすべて謄写されている点、及び紙料・筆体より判断すると谷大本に代表される刊本成立後の、近代以降の書写と考えられる。ただし、谷大本の脚註において「脱字」とされる箇所のうち、一箇

所が実は欄脱を指しており、こうした欄脱が京大本では訂正されている点などの資料的特色も見られる。

また、京大本の巻頭下部には「堯海写本」なる識語が確認され、右の書誌とは別に堯海書写本があったことが推察される。堯海については『国書人名辞典』によると、生没年は未詳だが文化（一八〇四～一八一八）～天保（一八三一～一八四五）頃の天台宗の僧侶で、比叡山竜成院に住し、天保十（一八三九）年に大僧正であった人物とされる[24]。尚、『日本古典籍総合目録』には堯海に関連する著作が五本確認でき、これらはすべて吉祥院南渓蔵となっている。このことと、『陀羅尼経疏』の近世期写本の所蔵先が吉祥院南渓蔵であることを鑑みれば、堯海は吉祥院と深い関わりのある人物であることが推測されるとともに、堯海書写本も吉祥院蔵本にゆかりのある写本と考えられよう。

以上の内容から『陀羅尼経疏』とは、中世～近世にかけて殆ど流布することのない、稀少かつ秘蔵の書として扱われていたことがわかると思われる。

三　『陀羅尼経疏』における被引用文献および全容

（1）被引用文献

ところで、原文には肝心の撰者名が記されていない。本書を良源の著作と見なす根拠となるのは、「慈恵大僧正撰」という古写本の識語による。そのため、本書が本当に良源の著作であるかをまず第一に判断する必要がある。そこで、『陀羅尼経疏』における被引用文献から本書の良源撰述説に対する真偽を図ることにする。被引用文献は以下の通りである。

『金剛頂経疏』（円仁撰）

『大日経』（善無畏訳・一行記）
『毘沙門天王経』（不空訳）
『諸仏集会陀羅尼経』（提雲般若譯）
『作壇落葉集』（撰者不明）
『金剛寿命陀羅尼経』（不空訳）
『仏説一切諸如來心光明加持普賢菩薩延命金剛最勝陀羅尼経』（不空訳）

引用文献のうち撰者不明の『作壇落葉集』という著作が見られる。ただしこれは引用文ではなく、『諸仏集会陀羅尼経』の引用文の下に「有二作壇落葉集一」と附記されていることから、本書にも同文が引用されていることを示唆したものと考えられる。また、後人による追記の可能性も否定は出来ない。その他、内容全体を確認する限り、良源撰述説に異論を挟む要素はないと考えられる。こうした前提のもとで概観すると、引用文自体非常に少なく、主に不空訳の経典や、不空以前の延命経典に位置づけられる提雲般若訳の『諸仏集会陀羅尼経』からの引用が殆どである。また、典拠は明かしていないものの、次に示すように円仁の『金剛頂経疏』巻一（或いは安然の『菩提心義抄』巻一所引の『金剛頂経疏』からの孫引き）を下敷きとした引用文が確認される。

『金剛頂経疏』および『菩提心義抄』	『陀羅尼経疏』
又金剛有二五種一。一者青色金剛、能除二一切災障一。二者黄色金剛、能昇レ空身輕。三者赤色金剛、能得レ出レ火。四者白色金剛、能得レ出レ水亦能澄レ水。五者碧色金剛、能消二諸毒一。如レ是金剛各具二二義一咸備二功能一。以譬下如	世間金剛随レ色異レ用謂青色金剛能除二災難一黄色金剛持レ身昇レ空赤色金剛出レ火白色金剛出レ水碧色金剛能除二諸毒一有二堅固利用二義一別有二三種義一一不可壊義二寶中之寶三戦具中勝世間金剛有二如レ是別説一今経所題之如

來五智利用碎二壞煩惱一滿中有情願上。或云。七種金剛。五如二前列一。更加二緑色及以紫色一以爲二七種一。今謂。七種金剛何過二五色一。但今青碧收レ彼且爲レ五耳。『釋論』明以二金剛一安二龜甲上一。以二白羊角一打レ之。金剛碎成二微塵一若金剛譬二如來智一者。佛智豈不レ壞耶。然『涅槃經』云。夫喩不可全取。或取二少分一或取二多分一。今且取二世間金剛少分相似一。以喩二出世常存不壞金剛一耳。

（『大正蔵』六一・八下）または
（『大正蔵』七五・四六七中～下）

来金剛部彼世間金剛有二外用一無二内益一所以非二滅罪成佛之寶一亦非二見佛聞法之便一而今佛智金剛外成二息災延命之願一内證二無上佛道之果一又世間金剛雖レ有二堅性一若安二亀甲上一以二白羊角一打之金剛碎成二微塵一而佛智金剛終無二散壞一夫喩不可全或取二少分一或取二多分一［大日経文］今且取二世間金少分相似一以喩二出世常存不壞金剛一也

（六丁裏～七丁表）

すなわち、五色の金剛を説明する部分と、仏智の金剛が堅固であることを喩えによって説示する箇所が対応している。また、『陀羅尼経疏』の文中にある「堅固」「利用」の二義、および「不可壞」「宝中之宝」「戦具中勝」の三種義を解釈する部分に関しても『金剛頂経疏』巻一[21]と該当する。ただし、『陀羅尼経疏』の「大日経文」の箇所については前後共に『大日経』にはなく、一方の『金剛頂経疏』の「『涅槃経』に云く」とある引用文は、『涅槃経』巻二九・「師子吼菩薩品」[22]と一致する。よって『陀羅尼経疏』の典拠は誤写であると考えられる。

引用文が少ないことは、良源独自の解釈が随所にみられることを顕している。こうした意味からも、本書は良源教学の一端を知る上での重要な資料と評価されよう。

（2）構成と全容

『陀羅尼経疏』の構成は「大意」、「釈名」、「入文解釈」の三門と「関連経典解釈・梵音解釈」よりなる。

第一門「大意」では題号釈により、経題を「仏説」「一切如来」と「金剛」を仏身と教法と分け、本経典の全体像を解説している。冒頭では、「一切の有情は生老病死の苦を免れず」とし、なかでも病死の二苦に対する恐れが強いとする。それに対して仏は伊王の法薬を宣説し金剛の法を説く。法の具体的内容は病患と短命を対治するものであるが、金剛寿命の義により如来常住の理を顕したものに他ならないとする。本経に「我昔未為衆生転此法輪」とあるのは、爾前の諸経の中には説くことがないとする。仏の身密弾指の響きは四種の浄土を動かし、口密は四方八方に響きわたり、意密により微塵数の仏と虚空に充満する。このように三密相応して異口同音に陀羅尼を説くために息災延命の計が顕現するという。「金剛」已下は所説の教法について明かす。

第二門「釈名」では総別の二義に分けて経題を解釈する。総義ではまず、「仏説一切如来金剛寿命陀羅尼経」とは諸仏の智印を顕す語であり、衆生の寿命を増す意義を示したものであるとし、仏と一切如来は異口同音に一陀羅尼を説く（自他満一の義）とする。本経は如来の本意の教えであり、この経典により皆仏界へと摂入するため、経中には二乗を列ねることはないとする。別義では仏と一切如来の関係を自土と他土に分けて説き、「金剛」已下は主に五仏と五智の関係を説き、五智により寿命を増益させることを説く。

第三門「入文解釈」では「序分」・「正宗分」・「流通分」の三つに分科し、『陀羅尼経』の本文を註釈する。序分はさらに「通序」と「別序」に分けられ、「通序」では『陀羅尼経』の冒頭部分を六時成就によって解釈する。中でも処成就に当たる「恒河」の解釈では、『本経』の利益を「阿耨達池」の功能に喩えて詳細に論じている。「別序」では、四天王に対して説いた四徳の内容と、四天王に対する詳細な註釈が為される。すなわち四徳とは「常楽我浄」のことで、常徳は死苦、楽徳は病苦、我徳は老苦、浄徳は生苦をそれぞれ対治するという。正宗分

では七つに分科し、仏・菩薩・天の関係性を示す。中でも第三・第四では仏の三密によって召集された菩薩・天の円融無礙なることと、所説の法が「秘密最上の説」と位置づける点が特徴的である。流通分は四項目から成り立っているが、特に第二において、本経に備わる現当二世にわたる利益の内容と、天寿を転じ様々な苦難を除く功徳を明かすことに主眼が置かれる。

流通分以下は『金剛寿命陀羅尼経』にまつわる①『諸仏集会陀羅尼経』、②『仏説一切如来金剛寿命陀羅尼経』、③『仏説一切諸如来心光明加持普賢菩薩延命金剛最勝陀羅尼経』、④『金剛寿命陀羅尼経』の四本の異訳について言及し、これら四本は基本、同一の義理を説くものとして位置付けるが、②が最も受容し易い経典であると評価する。そして最後に、「金剛寿命陀羅尼真言」の音写について、梵本における音と諸経典とを対校させ、その異同を明かして本経の註釈を終える。

本経を註釈するに当たって良源は、随文解釈といった逐次的手段をとることなく、主に密教の基本的教義を随所に導入し、本経の内容を達意的に示す傾向にある。しかし、密教の基本教義に基づきつつも、中には良源独自の解釈と考えられる内容もみられる。そこで、次項ではその教義的特色について述べてみたい。

四　『陀羅尼経疏』における教義的特色

(1) 五智と五仏の関係

まず、第一に特徴的と思われる内容について指摘したい。第二門「釈名」の「別釈経題」では、仏が摂する大覚位の智慧について次のような註釈がみられる。

次別釈二経題一以二人法一為レ名。謂佛者梵語略也。具足称多含即有二三義一。一覚義、二實義、三尊貴義也。具二

此徳二釈レ智摂二大覚位五智一。皆以二金剛一爲二所摂一。所以如二東方阿閦佛等一住二於恒河邊虚空東方一依二大円鏡智一放二青色光一令下一切有情成中就菩提心上。如二南方寶生如来一依二平等性智一放二黄色光一令二一切有情福徳円満一。如二無量壽佛一住二於恒河側空中西方一依二妙観察智一放二紅色光一令二一切有情智慧成就一。如二北方不空成就佛等一依二成所作智一放二五色光一令二一切有情事業成就一。教主釈迦牟尼如来住二法界体性智一面二向下一面二向東乃南西北方四維上一亦復如レ是現二不縦不横自在無礙之相一令下一切有情證二法界智一増中益壽命上（八丁表～八丁裏）

すなわち、五智の遍満によって寿命が増益することを示しているが、五智のうち、法界体性智以外の四智における如来と智慧の関連性はともかくとして、問題なのは法界体性智を司る仏が大日如来ではなく、釈迦牟尼仏とされている点に大きな特色がみられる。

そもそも本経の教主は釈迦牟尼仏であるが、「不縦不横自在無礙之相」とは、法身大日如来の徳性を示すものである。そうなると、生身である釈迦牟尼仏との関連性に齟齬をきたす事になる。無論、台密における「大日釈迦一体説」を標榜することでこの問題は一見すると矛盾なく解決できると考えられる。ただし、台密教義における「大日釈迦一体説」は主に、「彼の法華の久遠成仏は只だ是れ此の経の毘盧遮那仏なり」という『大日経義釈』所説の報身仏を基盤とした論理が前提となることに留意しなければならない。

ところが『陀羅尼経疏』では続いて、「夫壽命無レ體故以二意性一為レ形是故意得二真智一時即得二増益一所以々二生身一同二法身一堅固不レ動猶如二金剛一（八丁裏）」というように、寿命は意性、すなわち思考能力によって現されるとし、心に真智を得ることで利益を増すことができるとする。そしてこのことを仏身論上に喩えて、生身の釈迦は即座に法身と同体となることを明かしている。よって良源は、一体説よりも寧ろ、生身の釈迦牟尼仏に重点をおいた仏身論を推し進め、生身の釈迦そのものに、法身をみていたことが理解されるのである。

(2) 秘密曼荼羅思想による解釈

次に、第三門「入文解釈段」の第二「正宗分」における、金剛寿命陀羅尼が世間に流通する様相について註釈した部分から、良源の独自性を見てみたい。

七四天各説二陀羅尼一也。然一切如来釈迦尊同音説者表二白佛他佛覺同一一也。又佛先説菩薩次説天等後説者此経依二秘密曼荼羅一聖衆有レ二。一佛部攝二一切如来一。二蓮花部攝二一切菩薩一。三金剛部攝二一切権化忿怒衆及天等一也。従レ本現レ迹謂密教中不レ轉二此身一證二大覺位一為二利生一故還作二菩薩一。又於二衆生一尚有レ不レ順故菩薩更以二善巧方便一現二天等形一。次第依レ此。今経中顯二此義一故以レ佛為レ先菩薩為レ次天等為レ後也。餘法以二執金剛一攝二金剛部一今経中攝二蓮花部一者依二菩薩一故也。又表二弱中有二金剛性一。又此経中顯二三部常住不滅有二金剛性一。而則佛如来説二金剛陀羅尼一金剛菩薩列二蓮華部衆一外金剛部天准二於内衆一亦説二延命常住陀羅尼一也。又佛菩薩還レ本隠不レ現。而天等猶留二此會一佛菩薩帰後天等説二陀羅尼一者表二化現諸法歸レ空佛智金剛常存不レ滅也。以二天等一攝二金剛部一故也（十二丁表～十三丁裏）

このように良源は、「仏・一切如来＝仏部、執金剛・一切菩薩＝蓮華部、権化の忿怒衆及び天人等＝金剛部」というように、仏・菩薩・四天王の関係性を秘密曼荼羅すなわち大悲胎蔵生曼荼羅における三部によって達意的に解釈していることがわかる。さらに衆生教化の方法を解釈するにあたっては、自ら「密教に謂く」と述べ、教主釈迦牟尼仏の成仏の在り方が即身成仏にあることを前提とした上で、その仏がその後菩薩へと変化し教化し、それでも尚、菩薩の説に順じない者に対してはさらに善巧方便によって天等の形相をとって教化するとしている。

金剛智、および不空訳にかかる一連の『金剛寿命陀羅尼経』のうち、本経以外の経典については『金剛頂経』からの影響が顕著である。この点は良源自身が、『仏説一切諸如来心光明加持普賢菩薩延命金剛最勝陀羅尼経』と『金剛寿命陀羅尼経』の二経を「寄二秘密一譯（十四丁裏）」と評価していることからも明らかである。一方、

本経に関しては純粋密教の教理に基づく延命思想が確立するまでの、いわば過渡期の経典に該当するものである。しかし良源は、「已上四本大都同而随二譯者之意一或略或廣不レ違二其義一（十五丁裏）」と述べていることから、本経をあくまでも純粋密教の経典として位置づけようとしていた事が窺知されよう。

五　良源における延命思想

（1）神仙思想を代表とする外教の延命思想との比較

神仙思想とは不老長寿の人間、すなわち仙人の実在を信じ、仙術の修法によってみずからも仙人の領域に達することを祈願するものであり、主に道教を筆頭とした、古代中国において広く展開した思想である。『陀羅尼経疏』では、こうした神仙思想および外教における延命思想に対する言及がみられる。まず、「大意」では「一切如来」を解釈するに当たって次のように述べる。

> 難レ説難レ信必應レ召二集一切如来一。所以世尊身密弾指響普動二四種浄土一口密驚告音遙満二方維上下一佛眼盡二十方一矣。諸佛集微塵焉。檀満二虚空一和合意密為二加持一故二密相應異口同音説二陁羅尼一也。息災延命之計因之顕矣。滅罪生善之願因之成也。仙人服二金丹薬一雖レ延二生身壽一不レ云レ顕二法身壽一。（六丁表～裏）

すなわち、金丹の薬を服して延命を計るという神仙思想の主張とは、法身の寿命を顕すものではないとして批判する。また、「釈名」では陀羅尼を解釈する中で次のようにいう。

> 陁羅尼者梵語也。義多含故且出二三義一。一總持義。總破二煩悩一總持二善根一也。二明咒義。除レ闇加レ護也。三真言義。無レ有二虚妄一也。外人以二咒術一治レ病轉レ患。況諸佛如来真實明咒哉。外咒狂二惑世間一迷二乱有情一。今経明咒始終無レ損能利二衆生一也（九丁表）

ここでは陀羅尼に総持・明呪・真言の三義がありそれぞれの功徳について述べている。そして外道は呪術により治病・患転するというが所詮は衆生を困惑するものであるとし、それに対して、本経に説く陀羅尼とは如来真実のことばであるが故に、衆生に利益をもたらすものとする。

また、同じく「釈名」では「経」の意味について次のようにのべている。

経者聖教通名也。而諸佛出レ説教主名各不レ同出二賢劫四佛教名一。謂拘留孫佛教名二甘露鼓一…中略…狗那舎佛所説名為二法鏡一…中略…迦葉佛教名為二分別一…中略…今釈尊名為二契経一是則経緯之義也。譬如二世人説二経緯之亦織二出一服一。今仏説教亦復如レ是。権實異レ名遂為二一佛乗一也。今此経中有二如レ是義一。謂一切如来及執金剛菩薩同時来會同時隠レ形。此是表二権實同歸一常住畢竟空一之謂也。如二経緯異レ名同成一衣一。所以名レ経也。又外人有レ経。謂四因陀十八大経等也。但外典雖レ名レ経謂非二實相一。所以義與レ文。今経譬二経緯成レ衣非レ譬二権實不二一。又今釋尊為レ破二彼外経一故金口教亦名為レ経。以レ経故為二権実不二之義一。所以今別二内外一故置二佛説之字一也（九丁表～十丁表）

右の「四因陀、十八の大経」とは正しく、古代インドのヴェーダ聖典のことを指すが、良源によるとこれらは皆実相を示したものではなく、文章と内容を示しただけにすぎないとする。一方、釈尊の教えとは権実不二の義を備え、実相を表したものであると同時に、外教を破斥するために説いた教えであることを主張する。

神仙思想も去ることながら、そもそも肉体の存続や長寿無病を恣意的に願おうとする思想は、古代インドより人々の関心を集めてきた。釈尊はこうした立場を非難したが、それでも尚、大乗仏教の頃になると教義的・哲学的に洗練整備された部分のみならず、人間の本能的欲求を満たす現世利益的側面が顕著となった。その一つとして延命思想が展開されていったとみなすことができる。

ただし、延命思想を歴史的に考察すれば、延命そのものの内容や方法にもいくつかの段階がみられ、低次より

高次へと思想的な発展を遂げているのも事実である。その発展を担ったのが「金剛寿命陀羅尼」を宣揚する一連の経軌類であるといえる。そして、金剛寿命陀羅尼の功徳を基に良源は、他の延命思想との比較から、仏の智慧による法身の寿命の獲得こそが最も優れた延命であることを示唆していると考えられる。

（2）良源における延命の意義

このようにみると、仏の智慧のもとで成就される延命の優位性と正当性が主張されていたと考えられるが、では、延命行為そのものについて、良源はどのように捉えていたのであろうか。そこで最後に、「寿命」に対する言及をを頼りにこの問題について触れてみたい。「寿命」に関する具体的内容は「釈名」に次のようにみられる。

> 壽命者生者應世之義也。就二壽命一者有レ二。一内命、謂意想所居随レ事有二増益一。二外命、謂飲食所依随レ福有二出没一。諸佛以二智恵一為二内命一、以二衆機一爲二外命一。（八丁裏～九丁表）

良源は寿命を、現象世界に相応するに当たっての原動力と捉えている。そしてこの寿命に内命と外命があると定義し、これを仏の立場と衆生の立場に分けて論じている。すなわち衆生における内命とは思考能力であり、外命とは食物摂取によって得られるものというように、人間の日々の活動の持続期間を寿命と定義している。一方、仏については智慧を内命とし、衆生の機縁を外命とする。さらに、両者の違いを次のように説明している。

> 所以衆機不レ合時非滅現レ滅矣。有情無二食物一時自致二横死一。然今経轉二非命業一者能授二外命一也。使増壽命者能轉二定業一也。業即内命也。於二此経典一受持讀誦故衆機為レ合。是故諸佛増レ壽。諸佛増レ壽故一切衆生亦増二壽命一也。（九丁表）

すなわち衆生は食物が尽きると横死に至るように、仏も衆生の機が相応しなければ一時的に寂滅の境地に入る。仏が衆生に起こりうる予期せぬ行為（非命の業）を転ずることが外命を授けることであり、また、智慧という内

命を与えることで、衆生の宿業を転ずるとする。そして衆生自らが経典を受持読誦することで仏との機縁に合い、仏の寿命が増すことによってはじめて自らの寿命が保たれることを明かしている。このことは、仏との機縁に合うために、経典の受持読誦に代表される、仏道に準じた生命活動を行う必要性を強調していることに他ならない。

また「大意」において良源は、有情について「夫有情生身雖レ住二万代一遂有二盡期一千年如二夢過一矣現世尚可レ怖（七丁表）」といい、身体の永遠性を望むとはいえども、あたかも夢の如くいずれは尽きてしまうものであるとする。そのため、有情は現世において恐怖心を抱くのであると評している。これに対して良源は「而今此経力能延二生身壽一亦顕二法身徳一故縦此身雖レ有レ終同二身於法性一喩二體於金剛一故壽之果報永離二三悪一（七丁表）」と述べる。ここに、良源における延命の意義が看取されると考えられる。

すなわち「縦此身雖レ有レ終」というように、どれほど現世における寿命を延ばそうとも、そこには必ず限界があるという。それよりも、「身体に法身の功徳を得、三悪道を離れる」こと、すなわち成仏の実現こそが現世における指標であることを示唆していると考えられる。つまり、この時点で良源における延命とは、単なる長寿などの現世利益を願うものではなく、仏と同等の寿命を得る、すなわち成仏の境地に到ることこそが、延命の本来的意義に値すると捉えていたと考えられるのである。

おわりに

以上、誠に簡略ではあるが、『陀羅尼経疏』の全容と思想的特色を述べてきた。良源の密教的立場についてはこれまで、教相面については安然を代表とする台密諸師の思想を終始継承したのみで台密教義としては特に見るものがなく、寧ろ事相面の強化に徹したものと評価[23]されていた。こうした中で本書を通観すると、生身仏に重点

を置きつつも、法界体性智を釈迦牟尼如来の智慧とする独自の思想を展開したり、仏・菩薩・諸天の関係を大悲胎蔵生曼荼羅の三部を用いて達意的に解釈することで、本経を純粋密教経典として位置づけようとする姿勢が看取された。

また、外教における延命思想との比較を通して、仏教における延命とは「法身の寿命を顕現すること」、すなわち仏と同様の寿命を得ることを強調していた。このことは、成仏を視野に据えた延命の正当性を主張し、単なる人間の欲求を満たすための現世利益的傾向に執着した姿勢を批判していると考えられる。また、寿命を内命と外命に分け、これに対して衆生の立場と仏の立場との相違を明かしていた。特に衆生の寿命を「内命＝意性＝思考」、「外命＝食物などの外的要因によってあらわれる福徳」とする解釈から、良源は人間の日々の活動が持続する期間を寿命と定義し、経典の受持読誦を行い、仏の機縁に合うことでその期間が延びると述べていた。このことは、成仏の実現を目指す上での一方法論として、延命を位置づけようとしていた可能性を示唆したものと考えられる。

以上を踏まえて再度、密教における延命思想を見直してみたい。延命思想をめぐるこれまでの考察ではそもそも、仏教において〝なぜ延命をひたすら願うのか〟という、根本的な問いに対して、突き詰めた議論がなされてこなかったという問題がある。このことは、延命思想自体がどこまでいっても「〝長生きしたい〟という人間の根源的欲求を満たす目的」という認識で完結されてきたことに原因があると考えられる。しかし延命思想を教理教学のレベルから把捉するならば、所謂即身成仏思想や往生思想と同様、成仏論の範疇内に摂められる重要な思想として位置付けることができると考えられる。尚、本書の後世に与えた影響に関しては今回触れることが出来なかった。この点は今後の課題としたい。とはいえ、少なくともこれまでとは異なる形で良源教学の一端に迫ることができたと考えられる。と同時に、延命思想のもつ本来的意義についても併せて言及できたのではなかろう

か。

［附記］本研究にあたり、貴重な資料の閲覧を許可して下さった京都大学附属図書館特殊資料掛、また、同じく資料の閲覧および特別利用の許可、さらには資料の複写にご協力下さった大谷大学図書館の番場寛図書館長、図書博物館課の山内美智課長、図書館司書の金様、閲覧係の深堀様、沖田様、小原様、田村様、山田様、窪様、清水様、辻岡様、大橋様、天山様、石野様、小笠原様、及びその他皆様のご厚意に対し、この場を借りて衷心より感謝申し上げます。

【資料編】

大谷大学図書館蔵『金剛壽命陀羅尼経疏』翻刻

【凡例】

①本翻刻は大谷大学図書館所蔵『金剛壽命陀羅尼経疏』（一巻）全二十一丁の内、註釈部分に該当する第五丁表から第十七丁表に基づいたものである。

②原文中において〔太 字〕、【太 字】で表記した箇所は、京大本との校合によって発覚した欄脱である。尚、〔 〕で囲った文章（六丁表～七丁表）については京大本において欠落していることを示し、【 】で囲った文章については京大本に附されていることを示す。

③使用漢字については原則、原文と同様の字体を用いたが、異体字などで表記不可のものについては特殊フォントの使用を控え常用漢字で表記した。

④訓点のうち、原文中に欠けている部分は補った。

⑤送り仮名は省略した。

⑥原文に付されるルビはそのまま踏襲した。

⑦原文に付される下註は該当箇所の側辺に表記した。
⑧割注には〔　〕を付した。
⑨改行については紙幅の都合上、原文通りの改行とせず追い込みとした。
⑩原文において判読不可とされる箇所については□（ママ）と表記した。

（五丁表）

金剛寿命陀羅尼経疏

佛説一切如来金剛寿命陀羅尼経

将レ釈二此経一有二三門一所レ謂大意釈名入文解尺也

初大意者夫一切如来皆有二常楽我浄之徳一一切有情未レ免二生老病死之苦一是以如来哀二愍此一故即於二處〻一説下生時非レ
楽盛遂有レ衰之理上然諸人癡闇故不レ憶二生苦一妄習故不レ厭二老苦一於二此二苦一不レ為二憂怖一聖意随レ之不レ説二對治方法一
唯諸衆生於二病死二苦一除然甚怖（除恐深）是故世尊依二妙徳之請一宣二説伊王法薬一矣許二苦脱之説一證二明除病方法一也雖レ然於二
死怖活横一不レ轉レ定依レ之

（五丁裏）

遂近二東流恒河側一準二春季増益時一告二名義一於二四天一巡二聖容於十方一即説二金剛法一也楽音樹之説對二治病患一恒伽河
之数対二治短命一也而則由二金剛寿命之義一顕二如来常住之理一爾前諸経中所レ未レ説矣所以経云我昔未下為二衆生一轉中此
法輪上於（イマ）今方轉能令下二衆生寿命色力一皆得中成就上〔云云〕難レ説難レ信必應レ召二集一切如来一所以世尊身密弾指響普
動二四種浄土一口密驚告音遙満二方維上下一佛眼盡二十方一矣諸佛集微塵焉檀満二虚空一和合意密為二加持一故三密相應異
口同音説二陁羅尼一也息災延命之計因之顕矣滅罪生善之願因之

（六丁表）

成也仙人服二金丹藥一雖レ延二生身壽一不レ云レ顕二法身壽一無（無下恐脱於二四辨八音一宣二詮口誠言一故云二佛説一也一切如来者總以妄之處恐脱文）集為二一類一名二一切一以妄言之義也乘二如實道一来成二正覺一故名二如来一三身各有二如義来義一今但取二真身一也方今自土世尊召二集他土滿徳人一是故擧二顕中一也自土教主他土世尊同具二十号一然今題中釋尊称レ佛他土仏称二如来一者釋尊居二本土一無二来動一他土仏應レ請無来而来是故名二如来一今忽然現二空中一不レ還而隠是故今依二真身一釈也金剛已下所説之法也自土佛同達二堅固智一凝然常住无レ有二変易一如二金剛一金剛者以二堅固一

（六丁裏）

強為レ義以譬下一切如来法身壽量堅固不壊無始無終無中損破上亦世間金剛随レ色異レ用謂青色金剛能除二災難一黄色金剛持レ身昇レ空赤色金剛出レ火白色金剛出レ水碧色金剛能除二諸毒一有二堅固利用二義一別有二三種義一一不可壊義二寶中之寶三戦具中勝世間金剛有二如レ是別説一今経所顕之（顕恐題字）如来金剛部彼世間金剛有二外用一無二内益一所以非二滅罪成佛之寶一亦非二見佛聞法之便一而今佛智金剛外成二息災延命之願一内證二無上佛道之果一又世間金剛雖レ有二堅性一若（ヲ）安二亀甲上一以二白羊角一打之金剛砕成二微塵一而佛智金剛終無二散

（七丁表）

壊一夫喩不可全或取二少分一或取二多分一［大日経文］今且取二世間金少分相似一以喩二出世常存不壊金剛一也而則當時諸佛能顕二此義一以二五種一益一矣蓬萊生二不死薬一雖レ残二長生名一不レ云レ離二三悪趣一為（ヒム）レ（ナニ）何也又久患二身心一得後尚有レ愁況又聞レ名未レ見レ色夫有情生身雖レ住二万代一遂有二盡期一千年如二夢過一矣現世尚可レ怖而今此経力能延二生身壽一亦顕二法身徳一故縦此身雖レ有レ終同二身於法性一喩二體於金剛一故壽之果報永離二三悪一是大意也

次釈名者就レ題有二總別義一總言二佛説一切如来金剛壽命陀羅尼経一者顕二諸佛智印一之語増（コトハ）二衆生壽命一之

（七丁裏）

名也故取二金剛於喩一顕二壽命於題一又此経擧二自土他土佛力一顕二白他身同一一也所以初佛者自土世尊次一切如来者他

土佛是等諸佛同音説二一陁羅尼一是則顯二自他滿一之義一以二是等義一為二題目一是故皆捨二餘乘一應レ入二佛界一所以不レ召二聲聞縁覺一集二一切如来及執金剛菩薩一也今以二此経一尚可レ称二如来本意之教一何以故諸佛菩薩故如来佛乘之果菩薩佛乘之因也今此経中有二如レ是法一餘経不レ尓所以達池説法時召二舎利弗一遙王作レ請日列二縁覺一然今経會準留二本座衆一不レ召二餘方二乘一是故自他佛為二題目一也

（八丁表）

次別釈二経題一以二人法一為レ名謂佛者梵語略也具足称多含即有二三義一一覺義二實義三尊貴義也具二此徳一【於二四辨八音一宣二詮口誠言一故云二佛説一也一切如来者總集為二一類一名二一切一以妄言之義也乘二如實道一来成二正覺一故名二如来一三身各有二如義来義一今但取二真身一也方今自土世尊召二集他土滿徳人一是故擧二顯中一也自土教主他土世尊同具二十号一然今題中釋尊称レ佛他土仏称二如来一者釋尊居二本土一無二来動一他土仏應レ請無来而来是故名二如来一今忽然現二空中一不レ還而隠是故今依二真身一釈也金剛已下所説之法也自土佛同達二堅固智一凝然常住无レ有二変易一如二金剛一金剛者以二堅固一強為レ義以譬下一切如来法身壽量堅固不壊無始無終無中損破上亦世間金剛随レ色異レ用謂青色金剛能除二災難一黄色金剛持レ身昇レ空赤色金剛出レ火白色金剛出レ水碧色金剛能除二諸毒一有二堅固利用二義一別有二三種義一不可壊義二寶中之寶三戦具中勝世間金剛有二如レ是別説一今経所題之如来金剛部彼世間金剛有二外用一無二内益一所以非二滅罪成佛之寶一亦非二見佛聞法之便一而今佛智金剛外成二息災延命之願一内證二無上佛道之果一又世間金剛雖レ有二堅性一若安二亀甲上一以二白羊角一打之金剛砕成二微塵一而佛智金剛終無二散壊一夫喩不可全或取二少分一或取二多分一［大日経文］今且取二世間金少分相似一以喩二出世常存不壊金剛一也而則當時諸佛能顯二此義一以二五種一】釈レ智攝二大覚位五智一皆以二金剛一爲二所攝一所以如二東方阿閦佛等一住二於恒河邊虚空東方一依二大円鏡智一放二青色光一令下一切有情成中就菩提心上如二南方寶生如来一依二平等性智一放二黄色光一令二一切有情福徳円滿一如二無量壽佛一住二於恒河側空中西方一依二妙観察智一放二紅色光一令二一切有情智慧成就一如二北方不空成就佛等一依二成所作智一放二五色光一令二一切有情事業成就一教主釈迦牟尼如

来住二法界性智一（性上恐脱体字）面二（ムカフ）向一南西北方四維上

（八丁裏）

下一亦復如レ是現二不縦不横自在無礙之相一令下一切有情證二法界智一増中益壽命上夫壽命無レ體故以二意性一為レ形是故意得二真智一時即得二増益一所以々二生身一同二法身一堅固不レ動猶如二金剛一、、者諸佛智印也是故猶下於二五智一是金剛義上也壽命者生者應世之義也就二壽命一者有レ二一内命謂意想所居随レ事有二増益一二外命謂飲食所依随レ福有二出没一諸佛以二智恵一為二内命一以二衆機一爲二外命一所以衆機不レ合時非滅現レ滅矣有情無二食物一時自致二横死一然今経轉二非命業一者能授二外命一也使増壽命者能轉二定業一也業即内命也於二此経典一受持讀誦

（九丁表）

故衆機為（ナス）レ合是故諸佛増レ壽諸佛増レ壽故一切衆生亦増二壽命一也陁羅尼者梵語也義多含故且出二三義一一總持義總破二煩悩一總持二善根一也二明咒義除レ闇加レ護也三真言義無レ有二虚妄一也外人以二咒術一治レ病轉レ患况諸佛如来 如来（如来二字思剰）真實明咒哉外咒狂二惑世間一迷二乱有情一今経明咒始終無レ損能利二衆生一也経者聖教通名也而諸佛出レ説教主名各不レ同出二賢劫四佛教名一謂拘留孫佛教名二耳露鼓一是以レ譬爲レ名也如下以二上藥一塗レ鼓撃也聞レ聲者以二藥力一故消中除患上狗那舎佛所説名為二法鏡一説教無レ礙能入二衆心一如下鏡雖レ因能取（因能恐脱字）中形像上

（九丁裏）

衆心雖レ難レ信其説自入也迦葉佛教名為二分別一謂隔別開二三乗一而（而一作与）還不レ顕レ一故也今釈尊名為二契経一是則経緯之義也譬如四世人説二経緯之亦織二出一服一今仏説教亦復如レ是権實異レ名遂為二一佛乗一也今此経中有二如レ是義一謂一切如来及執金剛菩薩同時来會同時隠レ形此是表三権實同歸二常住畢竟空一之謂也如三経緯異レ名同成二一衣一所以名レ経也又外人有レ経謂四因陀十八大経等（トヲ）也但外典雖レ名レ経謂非二實相一所以義與レ文今経譬二経緯成レ衣非レ譬二権實不二一又今釋尊為レ破二彼外経一故金口教亦名為レ経以レ経故為二権実不二一

（十丁表）

之義ニ所以今別ニ内外ニ故置ニ佛説之字ニ也

次入レ文解釈者経文分為レ二ニ謂従ニ如是我聞ニ至ニ説對治法ニ是序分也就レ序有ニ通別ニ謂従ニ如是ニ至ニ大衆ニ倶通ニ諸経ニ従ニ尓時世尊告毘沙門四天王ニ至ニ對治法ニ則今経之通序有ニ六句ニ謂一如是者所聞法體二我聞者能持人是阿難也總持第一一聞永不レ忘結集之時蒙ニ聖旨ニ故稱ニ我聞ニ也三一時者聞持和合時也四佛者教主也五在恒河側者増益相應説経利物之處也謂阿耨達池有ニ四大河ニ其中東之河名曰ニ恒河ニ佛在レ此則説ニ此経ニ者東是春季分春是増レ物之時也準レ

（十丁裏）

之照ニ此處ニ尤適ニ増福延命之義ニ又五天之中雖レ多東河今哉此河者恒河是達池之流達池名ニ無熱ニ處レ中諸龍無レ有ニ三熱ニ以レ譬ニ此経力ニ也餘海龍必有ニ三熱ニ三熱者一熱沙著レ身焼ニ皮肉ニ曾而此達池必無ニ此熱ニ譬ニ此経力永無ニ病患ニ是故経云ニ色力皆得成就ニ一悪風暴起吹ニ其衣嚴等ニ而此達池以レ無ニ此苦ニ譬ニ此経力永無ニ災難ニ亦不下為ニ水火兵毒ニ之所中傷害上ニ金翅入レ海殺ニ龍子ニ而此達池次無ニ此怖ニ譬ニ此経力無レ有ニ横死ニ是故経云ニ終無天死短命之怖ニ依之如来在ニ達池池流ニ説ニ此経ニ也又捨ニ林野山中ニ在ニ河上ニ者河洗ニ垢穢ニ養者有

（十一丁表）

情爲レ用レ以レ譬下此経能除ニ罪垢ニ増中色力上也是故在ニ河側ニ也與諸比丘等擧ニ同聞衆ニ也就レ衆有ニ三類ニ一者比丘比丘者梵名也有ニ三義ニ謂乞士破煩悩怖魔也二菩薩者梵名略也具云ニ菩提薩埵ニ菩提者覚義智義薩埵者衆生也随順大覚能度ニ衆生ニ雖レ交ニ四生ニ而不レ除レ悪有ニ大志意ニ不レ捨ニ衆生ニ是故名ニ菩薩ニ三天人雑衆天者上界衆人者下界類也大衆倶者總結ニ大會衆ニ次第有レ由得ニ比丘衆ニ轉ニ法輪ニ初得レ道故初列也菩薩好ニ中道ニ故擧レ中也人天雑衆意在ニ下乗ニ故列レ下也別序中如来悲ニ愍一切有情ニ能知ニ時節ニ無レ問而告ニ四大天

（十一丁裏）

王名義ニ謂生病(病下恐脱死字)也如来以ニ四徳一能對ニ治此一四苦一謂常徳治ニ死苦一樂徳治ニ病苦一我徳治ニ老苦一浄徳治ニ生苦一也世人於ニ無常中一而生ニ(ナ)常想一於ニ無樂中一生ニ於樂想一於ニ不自在一而生ニ我想一於ニ不浄中一生ニ浄想一迷惑不レ解故名ニ四顚倒一而於ニ如来一有ニ常樂我浄一是為ニ真實四徳一於是(コトニ)必告四天者四天居ニ一山四方一能護ニ諸方一似下一覺位有ニ四徳一能化中諸生上也是故殊以ニ四天一為ニ對楊人一四天者天帝之兵神也同居ニ須弥半腹一各鎮ニ一鬼一不レ悩ニ衆生一東方天名ニ提頭賴吒一南方天名ニ毘樓勒叉一西方天名ニ毘樓博叉一北方天名ニ毘沙門一是名皆梵号也如レ次

（十二丁表）

翻為(セリ)ニ持國増長廣目多聞一也其中北天依正殊勝能有ニ大力一護ニ持佛及(オヨヒ)与世間一是故居レ(ヲ)首又持國天得ニ自在方便一攝ニ一切衆生一解脱門増長天得下滅ニ一切怨害一力上解脱門廣目天得レ消ニ滅諸龍熾然苦一解脱門多聞得レ以ニ方便一救下護悪趣衆生一解脱(甲)(脱下恐脱文)又多聞天殊有ニ勝力一故経云能満ニ諸勝願一解ニ脱諸悪趣一［云云］是四天王如レ是徳是故如来於ニ此経中一示ニ四天一也

従ニ尒時四天王一至ニ毘楼博叉陀羅尼一為ニ正説一也大分為レ七一四天作レ請謂四同時作(四同間恐脱天字)レ請者四天雖ニ名異一同居ニ一山一四者雖ニ名異一同在ニ一類一表レ此故爾ニ如来

（十二丁裏）

受レ請面ニ向十方一有ニ三密通一謂弾指是身力誓言是口力諸佛應レ請是意力ニ一切如来赴集然住レ空住者是円融無碍也教秘密最上説故也四正説ニ陁羅尼一陁羅尼分為レ三初句是開ニ如来口密一之初発ニ起如来誠言一之語(コトハ)也或為ニ帰敬分一或為ニ序句一也最後句是結ニ成如来真實秘密一之語也中間句義一一含ニ如来常住不滅之理一也秘故不レ可ニ解釈一五執金剛説ニ陁羅尼一也六他土菩薩還ニ本土一四天各(四上恐脱七字)説ニ陀羅尼一也然一切如来釈迦尊同音説者表ニ自佛他佛覺(サトリ)同一一也又佛先説菩薩次説天等後説者此経依ニ秘密曼荼羅一聖

（十三丁表）

衆有レ三一佛部攝二一切如来一二蓮花部攝二一切菩薩一三金剛部攝二一切権化忿怒衆及天等一也従レ本現レ迹謂密教中不レ轉二此身一證二大覺位一為二利生一故還作二菩薩一又於二衆生一尚有レ不レ順故菩薩更以二善巧方便一現二天等形一次第依レ此今経中顯二此義一故以レ佛為レ先菩薩為レ次天等為レ後也餘法以二執金剛一攝二金剛部一今経中攝二蓮花部一者依二菩薩一故也又表二弱中有二金剛性一又此経中顯二三部常住不滅有二金剛性一而則佛如来説二金剛陀羅尼一金剛菩薩列二蓮華部衆一外金剛部天准二於内衆一亦説二延命常住陀羅尼（羅下恐脱尼字）一也又佛菩薩還レ本隠不レ現而天

（十三丁裏）

等猶留二此會一佛菩薩帰後天等説二陀羅尼一者表二化現諸法歸レ空佛智金剛常存不レ滅也以二天等一攝二金剛部一故也従二佛告四天一已下流通分也又有レ四初説二常持乃至巻數一次明レ可二歸敬一謂誦二此経一者是金剛与レ佛無レ異是故説言二應如佛想一三明二現當利益一謂終不堕二悪道者是當来勝利也定増壽命等是現在勝利也正功徳無量故不レ為二一身一應二響為二一切一也少功徳以二廻向一成二廣大利一況此一切如来諸大菩薩等二密加持経廻二向一切一哉所以成二就増二長一切善根一増二長善根一故壽命亦増又為二一切衆生一誦二持此一故陰陽顯陽

（十四丁表）

一切衆生皆悉護二持此持経人一也衆生者指二胎卵湿化之生一是故攝二種々異形一是等皆擁護故現有二二勝利一謂内外之利也外轉二天壽一除二災難一除レ難略有レ四謂除二悪夢一轉二呪詛一拂二鬼怖一削（サ）水火兵毒等一是故定増二壽命一也内諸佛菩薩攝受護念也是則加二持身心一也又護二所依境界一是故説云二其處亦為仏所護持一也今生如レ是當来亦可レ尓四大衆奉行也

此経同本異譯有二四本一一者諸佛集會陀羅尼経〔古譯〕〔入二開元録一〕二者佛説一切如来金剛壽命陀羅尼経三者佛説一切諸如来心光明加持普賢菩薩延命金剛

（十四丁裏）

最勝陁羅尼経四者金剛壽命陁羅尼経其中以二第二第三第四本一於二世流布一但殊以二第二本一為（本下恐脱文）レ勝易二誦持一謂二譯者二

歳一既号二金剛智一顕レ徳最相應也就レ中字少文妙諸人稱レ善也次二本是寄二秘密一譯之不空智三歳所譯也謂第三本普賢延命軌也第四本是出二延命軌一也毘盧遮那於二迷廬頂一受二一切如来請一轉二金剛輪等四種輪一時降二三世菩薩降二伏天魔一令レ入二死門一尓時世尊説二金剛壽命陁羅尼一令二還得レ蘇破レ邪入レ正也集會経云此陀羅尼従二於一切諸佛一菩薩所二知見一［云云］又云若人自書若教レ人者其人則為二承事供二養

（十五丁表）

一切諸佛一何以故若於二衆生一能作二利益一則為三供二養一切佛一故若有二専欲レ擁二護其身一當下書二此咒一佩中著身上上若所在之處有二深信法一［云云］［有二作檀落葉集一］

延命経云［第二本］尓時四天王等承仕加持助二普賢菩薩延命一各立二誓言一娑訶世界南贍部州但有二此経法一流行之處我等四天即為二法護一令レ除二夭横一若有二此経法一清浄道場若不二降赴一願我失二此威光一損二我果報一追失二菩提心一不レ得二解脱一［云、］［有二延命形像并持誦法一］金剛壽命経現所有悪業因縁短命夭壽由レ持二此真言故信心清

（十五丁裏）

浄業障消滅更増二壽命一［云云］依二此法一者不レ轉二父母生身一陵レ空自在［云云］已上四本大都同而随二譯者之意一或略或廣不二違其義一取レ要攝レ之於二餘功能一者新古皆同仍不レ記之

陀羅尼中第四句弥［依二唐音一尾字］毘也故集會経有二毘字一延命経薩縛［云上音蘇也故延命経娑字集會経有二莎字一無二縛字一而近代愚人稱二沙留一是レ不可也］

第五句訖

梵本有二枳字一故集會経□字延命経羯字

藥

梵本有二疑音一故集會経羯字延命経誤也

（十六丁表）

而

梵本中有二慈音一故依二唐音一可レ誦故集會経時字延命経咏也

哦第六句哦

梵本有二隷音一故集會経迦字延命経咏也

第八九句隷〔有二大音一余二経同〕

第十句□〔有二連以音一延命経同〕

第十四十六句微

梵本有二毘音一故延命経吠字集會経陸字也

第廿一二句利

（十六丁裏）

集會経礼字有二連以音一

第廿三句之末广字

梵本有二縛音一故延命経集會経婆字也

次延命咒

延命経同有之集會経無之金剛壽命経無二餘句一唯有二延命咒一

今経中加持陀羅尼之末第三句广

梵本有二縛字一故延命経并金剛壽命同音有二縛字一今置レ广者可二唐音一也

師

（十七丁表）
梵本有二勢音一故延命并金剛注云某甲者稱二持者名一也若為二他人一彼人名
毘沙門咒第二句利
梵本有二連以音一故延命経隷字
第四天咒ノ广
梵本有二縛音一、字故延命経縛字集會経婆字今置二广字一者可レ依二唐音一也謂广唐嚩暦音也

壽命経疏一巻

註

① 延暦寺御修法および「普賢菩薩延命法」については武覚超「延暦寺御修法「普賢延命大法」」（『叡山仏教の研究』・法藏館・二〇〇〇八年）参照。

② 梅尾祥雲「延命法の史的考察」（『密教研究』四三号・一九三一年）

③ 初崎正純『秘密仏教における普賢延命法の研究』（科学研究費助成事業研究課題・種智院大学・一九六七年度）、同『密教における延命法の成立に関する研究』（『印度学仏教学研究』一五巻一号・一九六六年、科学研究費助成事業研究課題・種智院大学・一九六六年度）

④ 頼富本宏「密教文献に見る死生観」（『仏教における生死の問題』・日本仏教学会編・一九八一年）

⑤ 『金剛寿命陀羅尼経』の註釈書としては、国書所在の撰者不明の『金剛寿命陀羅尼経筆記』（一冊・【写】静嘉）と真言宗豊山派の学匠である栄性（一七六八～一八二五）撰『金剛寿命経略讃』一巻（文化四年刊・龍谷大学図書館蔵）が現存する程度である。因みに『東域伝灯目録』「衆経部」には「金剛壽命經疏一巻 善珠撰」（『大正蔵』五五・一一五二下）とあり、善珠（七二三～七九七）による註釈書の存在を明かしている。また、醍醐寺理性院の賢覚（一

○八○～一一五六）撰『転非命業抄』一巻（『大正蔵』巻七八所収）は、不空訳『金剛寿命陀羅尼念誦法』の内容を基軸とした、真言教学における生命観について言及した書物である。そのため、『金剛寿命陀羅尼経』の日本的展開を知る上では重要な著作である。尚、賢覚の『転非命業抄』については、延命思想との関連から改めて論ずることとする。

⑥ 主な研究としては浅井成海「慈慧大師良源の浄土教―四十八願の解釈をめぐって―」（『真宗学』一〇九・一一〇号合冊・二〇〇四年）同「慈慧大師良源の浄土教(1)『極楽浄土九品往生義』を中心として」（『真宗学』一〇八号・二〇〇三年）、井深 観圓「良源撰述『九品往生義』の真偽についての一考察」（『大正大学大学院研究論集』二五号・二〇〇一年）、梯信暁「良源『九品往生義』の念仏思想」（『印度學佛教學研究』四九巻一号・二〇〇〇年）等があげられる。

⑦ 大久保良峻「良源撰『被接義私記』について」（『天台学報』三六号・一九九三年）

⑧ 『草木発心修行成仏記』に関する最近の論考については堀端俊英「草木成仏にみる宗教的自然観―旦那疑問御廟決答『草木発心修行成仏記』の考察を中心に―」（俊英文庫・二〇〇六年）等があげられる。

⑨ 良源研究の全体像を知る上では、右に挙げた研究成果に加え、叡山学院編『元三慈恵大師の研究』（同朋舎・一九八四年）が大いに参考となる。

⑩ 多田厚隆ほか校注『天台本覚論―日本思想大系九―』（岩波書店・一九七三年）

⑪ 頼富本宏「密教文献に見る死生観」（『仏教における生死の問題』・日本仏教学会編・一九八一年）。ただし、E本についてはこれら両系統の内容を総合し、独特の体系を作り上げた経典として位置づけている。

⑫ 頼富本宏「密教文献に見る死生観」（『仏教における生死の問題』・日本仏教学会編・一九八一年）

⑬ 実霊の生没年について『国書人名辞典』では、没年が寛政一二（一八〇〇）年となっているが生年は未詳とされている。しかし、『大正蔵』巻七五所収の『金剛界淨地記』の奥書には「延享四丁卯七月十八日近江國延暦寺東塔南澗吉祥瑜伽道場記之請生生世世信受奉行利有情界 天台山沙門 實靈齢三十」（『大正蔵』七五・三九中）とあり、延享四（一七四七）年の段階で三〇歳であることがわかる。よってこの記述より、生年は享保二（一七一七）年に比定される。

⑭ 『日本古典籍総合目録』データベースでは国書所在に［【写】吉祥院南渓蔵（宝暦一二実霊写）（文政一〇豪観写）］

とある。

⑮ ①『昭和現存天台書籍綜合目録』（巻下・六八四頁）および②「慈恵大師著作目録及び関係文献目録」（叡山学院編『元三慈恵大師の研究』三一八頁）。なお、②には良源撰『寿命経大意釈名』なる著作が『日仏全』第四二に収録されているとある。しかし、『日仏全』の第四二とは、『天台法華宗義集』や『天台小部集釈』を収録した第二四の間違いであろう。しかし、第二四にもそのような著作は収録されていない。

⑯ 筆者自らが調査した大谷大学図書館蔵本の書誌情報を以下に記しておく。

請求記号：余大三八七一、冊数：一冊、漢写：漢文刊本、匡郭：なし、界線：無界、行格：一〇行二〇字、丁数：二一丁、装丁：四つ目綴・袋綴、法高：縦二五・八cm、横一六・九cm、外題：書題箋「金剛寿命陀羅尼経・疏 慈恵大師」、内題：金剛寿命陀羅尼経疏、旧蔵印：「眞宗大學圖書」「大谷文庫」「武陽東叡 □順田蔵書 胤海法孫 不出門外」の印あり、内容注記：虫損あり・本文下部に脚註あり。

⑰ 京都大学附属図書館蔵本の書誌情報は以下の通り。

請求記号：日蔵・未刊・七六、冊数：一冊、漢写：漢文写本、界線：無界、行格：一〇行二〇字、丁数：二〇丁、装丁：二つ目綴・袋綴、法高：縦二四・八三cm、横一六・五cm、帙入、外題：なし、内題：金剛寿命陀羅尼経疏、旧蔵印：「京都帝國大學圖書館印」、内容注記：表紙なし、裏表紙なし、朱点あり、朱書きあり、切り抜きあり

⑱『青蓮院門跡吉水蔵聖教目録』（汲古書店・一九九九年・四〇八頁）には「書本云／慈恵大僧正御作也・此書／未有多本・可秘蔵、、、／于時延應元年五月／十一日・以或人本書写之・／大師御作之也・依尤貴・／払老眼・所奉写之已／是此法、口決也・不可／聊尓而已／慈愍法師（以上本奥書）／正應元季九月卅日／於摂州有馬草庵／書写校合了／求法隠士月観」とあり、延応元年写本とは、慈愍法師なる人物による書写であったことがわかる。

⑲「日本古典籍総合データベース」によると四天王寺国際仏教大蔵本も同じ識語を有しているいるため、大谷大学所蔵本と同本であると考えられる。

⑳『国書人名辞典』（巻二・六六頁）

㉑「言金剛者。是堅固利用二義。即喩名也。堅固以譬實相不思議祕密之理常存不壊也。利用以喩如來智用摧破惑障顯證極理。又極理從本具摧破用故云利用義。智用自體無有滅壊故爲堅固義。又世間金剛有三種義。一不可壊。二寶中之寶。三戰具中勝。即顯極理具三種義也。」（『大正蔵』六一・八中～下）

㉒「善男子。凡所引喩不必盡取。或取少分或取多分或復全取。如言如來面如滿月是名少分。」（『大正蔵』巻一二・五三七上）

㉓獅子王円信「慈恵大師の密教」（『元三慈恵大師の研究』）、梅田圓鈔「慈恵大師の教学概観並に本覚思想の発端」（『元三慈恵大師の研究』）

キーワード　良源、延命、金剛寿命陀羅尼経